夏学期レポート
言語文化横断論
S.Y 先生

聴講生　08-139501 菊島　和宜

Lawrence Venuti の The Translator's Invisibility について

授業でLwarence VenutiのThe Translator's Invisibilityの一部を担当して、Venuti の"Foreignization","Domestication", "翻訳者の Invisibility"に関心を持った。しかし、Foreignization, Domestication の概念は朧ながら分かったものの、どのような翻訳の仕方が、Foreignization なのか、Domestication なのか十分に理解できなかった。このレポートの I 部で Venuti の理論を再度整理してみた。II 部では、授業で扱った川端康成の「雪国」の Edward G. Seidensticker の英語訳について、Foreignization を意識した翻訳か、Domestication を意識した翻訳かを考えてみた。これは、決して Seidensticker の翻訳を批評したり、誤りを見つけるとかの大それたものではなく、原文を読みながら、日本的なもの、日本的な表現、川端康成の美の表現に出くわすと、これがどのように英語に訳されているかをみて、私の Foreignization, Domestication の理解の一助にしたいと考えた。雪国の原文は新潮社文庫版を、英文は Charles E. Tuttle Company 発行の"SNOW COUNTRY"を使用した。

I　Lawrence Venuti の The Translator's Invisibility

Venuti の Foreignization, Domestication の理論はドイツの哲学者 Friedlich Schleiemacher の概念を発展させている。

Schleienmacher は、1813 年、異なる翻訳の方法についての講義で、「翻訳の方法は 2 つあるだけである。出来るだけ著者を動かさないで、読者を著者に近づけるか、読者を出来るだけ動かさないようにして、著者を読者に近づけるかどちらかである。」と言っている。

"there are only two. Either the translator leaves the author in peace, as much as possible, and moves the reader towards him; or he leaves the reader in peace, as much as possible, and moves the author towards him"(Venuti, 1995: 20)

どちらの方法を取るかは、翻訳者の自由に任されるが、Schleiemacher は foreignizing translation(読者を著者に近づける翻訳)を選ぶと明言している。

Venuti は、この Schleiemacher の domesticating method と foreignizing method の概念を発展させている。Venuti は、この相反する二つの翻訳戦略を Domestication(自国化翻訳)と Foreignization(異国化翻訳)と言う用語で説明している。

Domestication(自国化翻訳)

始めから目標言語で書かれていたかのような滑らかな訳文を書く翻訳者の状況のことを、翻訳者の Invisibility(不可視性、透明性)と表現して、その翻訳法を”Domestication”(自国化翻訳)と Venuti は呼んでいる。現在の英米商業出版においては、翻訳は「原典としての外国語の文章がある」ということを隠すかのように英語特有の表現や言い回しを使って流暢な(Fluent)文章で、外国人作家が「もともと英語で書いた文章」のような扱いになっているという。起点言語で目標言語には適さない要素を消去することで、原典の存在は翻訳上には見えてこない。異なる地域的・社会的環境から生じる政治・文化的差異は抜き取られ、英米読者が精通した環境をできるだけ翻訳の中に作り出す。こうした翻訳における翻訳者の存在は、外国語原典の筆者の後ろに隠れた「見えない(invisible)存在」として、二次的な地位しか得ることが出来なくなる。

Foreignization(異国化翻訳)

これに対抗して、Venuti は自民族逸脱主義としての Foreignization(異国化翻訳)を提唱している。異文化を体験する場を目指す翻訳は、外国語原典が持つ特異性を出すものでなければならない。目標言語には無い起点言語の文書上の差異をあえて読者にみせつける。読者はこうした特異な文章をよむことで初めて外国語文学の翻訳を呼んでいると意識出来るようになる。

Venuti は Foreignization(異国化翻訳)の矛盾点に関しても認識している。Foreignization(異国化翻訳)は主観的かつ相対的な用語であり、ある程度の Domestication(自国化翻訳)は伴う。なぜならば、支配的な目標文化の価値観から離れて可視化するためには、起点言語を目標文化のために翻訳し、支配的な目標文化の価値観に依存することになるからであるという。

私も、外国語の翻訳は、Venuti の主張するように、Foreignization(異国化翻

訳)を主体にすべきだと考える。特に外国文学の翻訳など、その国の文化、原作者の表現を、ぎこちなさが残るかもしれないが、できるだけ、生かすように翻訳すべきだと考える。しかし、一つ疑問に感じることがある。何故、「Domestication(自国化翻訳)」、「流暢な翻訳」が翻訳者の不可視化につながるのだろうか。確かに、翻訳が流暢な文章でなされていれば、それが、あたかも原作者が目標言語で始めから書かれたものだと思い込み、翻訳者の存在は見えなくなる。しかし、こんなに流暢な目標言語に訳したのは、翻訳者であるということを明らかにすれば、翻訳者の存在は Visible になり、翻訳者の評価も高まり、その地位も向上するのではないだろうか。

Ⅱ．川端康成「雪国」の Edward G. Seidensticker の英文への翻訳は”Foreignization” か、それとも”Domestication”か。

(1)雪国という原本の選択が既に Foreignization

翻訳に際し、日本の代表的文学という文学作品が、英米の読者に受入れられるかとの不安は十分あったと思う。しかしこの翻訳は UNESCO の援助によってなされたと記されている。従って、どの程度の援助かは不明であるが、翻訳本を売って利益を上げなければという出版者の商業主義からくる心配はなく、英米人には理解されるか分からない川端康成の文学を選択できたのではないか。

(2)冒頭の一節

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。

The train came out of the long tunnel into the snow country. The earth lay white under the night sky. The train pulled up at a signal stop.

原文の第 1 文には日本語に特有な主語の無い文であるが、英語では主語が必要であるので、訳者は The train を主語にしている。”the” がついているので、島村の乗っている汽車の意味になるであろう。原文の日本語の味を出す為に、主語のない英文に訳すのは冒険であろうか。自分なりに主語無しで英訳してみようと試みたが、主語なしでは、上手くいかなかった。

第 2 文で Seidensticker は、”<u>The earth lay white under the night sky</u>.”の部分を次のように書き換えたとのことである。

“<u>The bottom of the night turned white.</u>”

この二つの翻訳を比較してみて思うことは、後者は全くの直訳である。このような直訳では拙いと言う人もいるが、この後者の訳を見ると読者は、川端康成の表現にすこしでも近づくのではないかと訳者は考えたのではないか。読者はその真の意味をあれこれと考えるであろう。私は、それはそれで宜しいのではないかと思う。と言うのは、日本人が原文でこの文章を読む時にも、川端康成の本当に伝えたいことをあれこれと迷い、考えている。英米の読者も同じ夜に考えるのがいいのではないか。後者が Foregnization に通じる翻訳でないかと考える。

(3)英米にはない物事、現象の単語の英訳

日本文化の特別な物などの英訳をどうするか。原文を読みながら、日本独特の物事、現象に出くわす毎に、興味を持って、どのように英訳がなされているか、原文との比較を行ってみた。以下はその一部である.

悲しいほど美しい声で(P.7)→It was such a beautiful voice that it struck one as sad. (P.5)
宿屋の客引きの番頭(P.13)→The Porter from the inn(P.12)
内湯(P.15)→bath(P.14)
帳場(P.15)→office(P.14)
あけびの新芽（P.17）→The new sprouts (would be gone from the table.)(P.16)
半玉(P.18)→young apprentice geisha(P.17)
花柳界(P.19)→the pleasure quarters(P.19)
所作事(P.23)→the Japanese dance and the dance-drama(P.24)
黒い悲しみ(P.52)→a dark loneliness(P.54)

番頭は bantou, 内湯は uchiyu と日本語のままにして*注をつけて説明すればよいのではないか。英米に無いものを、それに近いが同じイメージではない英語に置き換えるよりも、日本語のままの方がよいのではと思い、生意気にも注をつけてみた。
*bantou=A chief employee of an inn who welcomes visitors at the station and takes them to his inn.
*uchiyu=Bath attached to individual room of the inn. When Japanese stay at hot spring inn, they like to take large bath common to all guests, beside

“uchiyu”.

以上のような単語の訳では、物語の筋を追っていくだけであれば、全然問題がない。しかし、原作者が表現したいと思った、情景は読者に伝わらないのではないか。と若干心配になった。

そんなことを心配しながら英文との対比を読み進めたら、火燵(kotatsu), 帯(obi)が日本語のままでローマ字で書かれており、これだと日本的ニュアンスが読者にある程度伝わるのではないか、或は伝わる一助となるのではなないかとホットした。これの日本語には脚注が次のようにつけられていた。原文の日本語をそのまま使い、これに注をつけるのも、Foreignization の一つの形態ではないであろうか。

kotatsu(P.16)=A charcoal brazier covered by a wooden frame and a quilt. Although it warms little more than the hands and feet, the kotatsu is the only heating device in the ordinary Japanese house.

obi(P.18)=The sash with which a kimono is tied. A woman’s obi is wide and stiff, a man’s narrower and usually softer.

さすがに芸者(Geisha), 歌舞伎(Kabuki)は注無しで日本語そのままでローマ字で書かれていた。

一つ私が関心を持ったことは、「黒い悲しみ」であった。川端康成は良く色で人の感情を表現すると言われている。「黒い悲しみ」といっても、さてどんな悲しみなのかと思ってしまう。翻訳では a dark loneliness と訳されている。この訳の方が理解し易い。しかし、思い切って dark を文字通り black に変えて、読者を川端康成の世界に引き寄せることはどうであろうか。

(4)日本的表現の翻訳

「古びた廊下は彼の踏む度にガラス戸を微かに鳴らした。」(P.15)

日本人にはこの情景は良く理解できる。古い旅館の細長い廊下。廊下の床は踏むたびに軋んで、その振動がガラス戸に伝わって音を立てる情景だ。こんな情景を英文にして、英米の読者に理解できるであろうか。英米にはこんな建物

はないはずだ。Seidensticker の翻訳は次のようなものであった。日本の旅館の状態を想像できるのではないか。

The glass doors rattled slightly each time he took a step down the sagging corridor.(P.14)

「直ぐ立ち上がって行こうとする女中の袖を女がとらえて、またそこに坐らせた。」(P.18)

「袖を女が捉えて」の表現に興味を持った。「私をこの男の人と二人だけにしないで、」という初心な娘の袖にすがりついた気持ちが伝わってくる。英文ではこの部分の訳が省略されている。ここまで英語に訳すことは不可能なのではないのかと思った。

The maid started to leave but was called back by the woman.

「窓に腰を下ろすと、」(P.20)

原文でも日本家屋の構造を知らないと意味がとりにくい。恐らく敷居の少し高くなっている外に面した窓のことを言っているのだと思うが、或は、廊下と部屋の境にある敷居の高い障子風の窓の敷居に腰掛けているともとれる。訳者は window sill(窓の敷居)と訳しておられるが、これが正しい訳だと思うが、読者にはその情景がつたわるか。日本文化の翻訳の難しさを知る。

sat down on the window sill.(P.20)

「お酌に出たこともある女にしては、こころもち鳩胸だった。」(P.31)

お酌にでる文化が英米にはないのではないかと思い、「お酌に出たこともある女」どう訳すかに関心をもった。これを、次のように訳しているのは名訳だと思った。

Her breasts were rather full for a woman used to the high, binding obi of the geisha.(P.33)

(5)伊藤整は、同書(新潮文庫)の巻末に「雪国について」と題する小文を載せている。そして次のように述べている。「この作者の美の把握の微妙さに驚くのは、主人公の島村が、夕暮の汽車の窓に写る葉子の姿と、その硝子越しに移ってゆく風景と遠い灯との重なる場面から始まる。」として、次の文をあげている。

伊藤整の言う「美の把握の微妙さ」は、日本人が日本語で読んでも難しい。薄暗い汽車の窓に写る葉子の姿とその硝子越しに移って行く景色と遠い灯が重なり合う場面である。何回か読み直してみて、その情景、美しさが朧げながら分かってくる。このような情景を英語に直す事が如何に難しいか、日本語を読みながら、思いつつ、英訳と照らしてみた。おそらくここまで訳すのに訳者は相当苦労されたのではないか。訳の出来映えを云々する資格は無いが、川端康成の文体、美しさの表現をできるだけそのまま残して、訳そうとしていている様子が窺える。これが Foreignization を目指した翻訳だと思うし、又文芸作品の翻訳は Foreignization であるべきではないのか。

「窓の鏡に写る娘の輪郭のまわりを絶えず夕景色が動いているので、娘の顔も透明のように感じられた。しかしほんとうに透明かどうかは、顔の裏を流れてやまぬ夕景色が顔の表を通るかのように錯覚されて、見極める時がつかめないのだった。」(P.10)

Cut off by the face, the evening landscape moved steadily by around its outlines. The face too seemed transparent – but was it really transparent? Shimamura had the illusion that the evening landscape was actually passing over the face, and the flow did not stop to let him be sure it was not.(P.10)

「汽車のなかもさほど明るくはないし、ほんとうの鏡のように強くはなかった。反射がなかった。だから、島村は見入っているうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしまって、夕景色の流れのなかに娘が浮かんでいるように思われた。」(P.11)

The light inside the train was not particularly strong, and the reflection was not as clear as it would have been in a mirror. Since there was no glare, Shimamura came to forget that it was a mirror he was looking at. The girl's face seemed to be out in the flow of the evening mountains.(P.10)

「そういう時、彼女の顔のなかにともし火がともったのだった。この鏡の映像は窓の外のともし火を消す強さはなかった。ともし火も映像を消しはしなかった。そうしてともし火は彼女の顔のなかを流れて通るのだった。しかし彼女の顔を光り輝かせるようなことはしなかった。冷たく遠い光であった。小さい瞳のまわりをぼうっと明るくしながら、つまり娘の眼と光とが重なった瞬間、彼女の眼は夕闇の波間に浮ぶ、妖しく美しい夜光虫であった。」(P.11)

It was then that a light shone in the face. The reflection in the mirror was

not strong enough to blot out the light outside, nor was the light strong enough to dim the reflection. The light moved across the face, though not to light it up. It was a distant, cold light. As it sent its small ray through the pupil of the girl's eye, as the eye and the light were superimposed one on the other, the eye became a weirdly beautiful bit of phosphorescence on the sea of evening mountains.(P.10)

(6)まとめ

文学小説を翻訳するのは、Foreignization でなければならない。もし英米の読者に理解してもらうために、Domestication に徹すれば、それは単なるおとぎ話になってしまう。この翻訳者 Seidensticker も、出来るだけ川端康成の表現、日本文化を忠実に訳そうと努められ、読者を川端康成に近づけようとしている。

新潮文庫では、かなり多くの言葉に注をつけ詳細に説明している。例えば「雪国の長いトンネル」(P.5)、「悲しいほど美しい声で」(P.7)、「内湯」(P.15)、「所作事」(P.23)、「狛犬」(P.29)、「黒い悲しみ」(P.52)その他多数。日本人にも理解するのに注が必要であるように、難解な川端康成の文学をそのまま翻訳することは、至難の業であると思った。どんな英文を使っても、表しきれない、日本文化、川端康成の美の表現があり、翻訳の限界を感じた。これを補うものとしては、映画等の映像と合わせて、鑑賞すれば、読者の理解も深まるのではないだろうか。あるいは映像の力を借りなければならない翻訳は敗北なのか。

「雪国」は、中国語、ドイツ語、フランス語その他多くの言語で翻訳されているようである。これらの翻訳本が入手出来、これらの言語がある程度わかれば、これらの言語でどのように翻訳されているか、そのような機会があることを楽しみにしています。

以上

参考文献

The Translator's Invisibility−A history of translation by Lawrence Venuti (1995 年版)Website よりダーンロード
翻訳学入門ジェレミー・マンディ　鳥飼玖美子監訳　みすず書房
雪国　新潮社版
"SNOW COUNTRY"Edward G. Seidensticker 訳 Charles E. Tuttle Company
「言語を更新する翻訳」　斉藤美野